

＜講演＞山上国際学寮
被爆者の証言を聴く

東條 明子

東京大空襲の後、広島へ

私は東京生まれ東京育ち、国民学校1年生の12月8日に、第二次世界大戦（大東亜戦争）が勃発し、現在の新宿に住んでおりましたので、何度か空襲の恐ろしい目に遭遇いたしました。1945年3月10日の東京大空襲は、B29の大編隊がカラスの大群のように東京の大半を絨緞爆撃したことで、一夜にして10万人の市民が犠牲になりました。東京中の空が真っ赤にそまり、迎え撃つ日本の飛行機はなく、やられっぱなしの空襲でした。その日、わが家は焼け残りましたが、町は荒れ果てて一変しました。

3月末に、祖父の老家がある広島へ疎開が決まりました。私が10歳、下に7歳、3歳、1歳の妹や弟がおり、母と5人で生まれて初めての犬混乱の列車に乗り込みました。広島の知人宅に着いたのは翌日の夕方、目の前に広島城がそびえる大本営の軍人さんの留守宅でした。奥さまが1人で私たちを迎えてくださいました。その家は大邸宅でしたが、母はその後、転々と住居を替えました。

8月6日午前8時15分

私たちは祇園というところにいました。祖母の姉の家で、ご夫婦と、私と同年の男の子、その妹と弟の一家でした。そこへさらに東京から叔母と幼い男の子が2人合流しました。その日は夏休み中の登校日で、雲一つない青空の下、広い田園のずっと向こうに見える、祇園国民学校へ集団登校しました。木造校舎の2階教室で、窓ガラスを拭いていると、「あ、B29」と誰かが叫びました。真っ青な空にB29が1機、銀色に光って飛んでいます。かすかに白いものがスーッと糸を引くように落下しました。次の瞬間、太陽が爆発したかのような白色の大閃光に全空間を覆われ、皆バタバタと床に倒れ伏しました。東京の空襲とは全く違う、この大閃光。最悪の予感がしました。そのときでした、「ナンマンダブ」、私の口に一声のお念仏が飛び込みました。次の瞬間、轟音と同時にすさまじい爆風が起り、一瞬にしてガラス、壁、天井、床板など、木っ端みじんに吹き飛ばし、伏

せている生徒たちの上に降り積もって、がれきの山となりました。

後で知ったことですが、この原子爆弾は600メートル上空、東京スカイツリーぐらいの高さで爆発し、傘のように広がって地上に落下したため、爆心地にいた人々は一瞬にして蒸発し、骨も残らなかったということです。ちなみに大閃光の熱線は2万度、爆風は時速1000マイルです。非人道的な原爆によって、広島市内はまさにこの世の地獄と化したのです。その後のありとあらゆる悲惨な状況は、ここではお話しいたしません。

キノコ雲の消えるまで

私たちは何が起きたのか分からず、身動きもできません。やがて階下から先生の叫び声が聞こえ、がれきの中から起き上がり、がれきの山の階段をたどり、校舎から脱出しました。2年生の妹を探し、防空頭巾だけかぶり、近所の同級生と3人で家を目指して歩き始めました。空はどんよりと曇り、蒸し暑く、朝とは大違いでした。家の近くまで来てふと振り返ると、木造2階建ての校舎の真後ろに、巨大なきのこ状の雲が空一面に立ち上がり、恐竜のようにうごめいていました。

家に着くと、天井板は剥がれ、畳や家具は庭に散乱しています。農家の床は高いので、爆風で床下から巻き上げられたのです。私は子供係で、小さな子供たちを守りながらずっと畑にいました。空がかき曇り、降ってきた雨が黒い雨とも知らずぬれながら、空一面にうごめくキノコ雲を見つめていました。

日中は灰色がかかった白い噴煙が太い柱状になって、空高く、(1万7000メートル)天に至り、きのこ状に傘を広げ、刻一刻と変化しながら燃え、日が暮れかかると空の闇が濃くなるにしたがって、暗紅色と深紅の入り交じった赤い柱となって、広島空を占拠していました。私は大人の目を逃れ、キノコ雲の一部始終を見届けようと、夜の庭に立ち尽くしていました。朝になると、また灰色に戻り、夜にはまた赤い柱となって、少しずつ変貌しながら三日三晩燃え続け、4日目には宇宙のかなたへ消えていきました。私の脳裏には、真つ暗闇の中、祇園国民学校の校舎をシルエットに、その後ろに真つ赤に燃え上がる夜のキノコ雲が、写真のポジフィルムのように焼き付けられ、78年たった今も、そして私の命のあるかぎり消え去ることはありません。

ここで少し訂正させていただきます。キノコ雲が消えるまでのお話をいたしましたが、専門的には、原爆が爆発して地上に落ちたのちの30分間を「キノコ雲」といい、そのあとの、同じ場所、同じ現象の雲を「火事嵐」と呼ぶのだそうです。というこ

とを昨年指摘されました。10歳だった私には、その境は分かりませんでした。

戦後の人生

広島を襲った爆弾が何だったのか、何の情報もないまま混乱状態が続きました。当時のことは、現在ではテレビや映画や書籍にたくさん残されておりま

す。今振り返ると、母は前日に建物疎開の勤労奉仕に市内へ出ており、もし8月6日当日であったら、私は爆心地に母を探しに行き、二次放射線を浴びてとっくに死んでいたでしょう。また、広島に来た日の家にそのままいたら、私の家族は全滅していました。私たちは紙一重のところでは生かされたのです。広島は一夜にして14万人の死者、その後続く犠牲者20万人、現在に至るまで原爆症に苦しんでいる人は数限りありません。私の一族も、弟、妹、いとこなど、若くしてがんなどで病死しています。私も20代の出産後、白血病寸前で、50代まで貧血が続きました。

私の脳裏の奥深くに残るあのおぞましい映像は、二度とあつてはならない被写体です。その中に今も多くの命が燃え続けています。平和な時代が来ても、戦時の後遺症は癒やされず、原爆のトラウマから逃れることができずに傷付いていました。

殺すなかれ。殺さしむるなかれ

その後、私は浄土真宗本願寺派で僧籍をいただき、仏様の教えの中で真実に出会うことができました。2500年前のお釈迦様の教えの中に、戦争のことも武器のことも、人間の心のことも残されておりま

- す。真理の言葉は、時代を越えて永遠に真理であります。私が語り部、被爆証言をするときは、必ずお釈迦様の真理の言葉を結論としてお伝えしてきました。その言葉をお伝えいたします。
- ①すべてが杖罰に慄き、すべてが死を怖れる。わが身に引き比べて、殺すなかれ、殺さしむるなかれ。『法句経』
 - ②実に、怨みが怨みによって息むことは、この世では決してない。怨みを捨ててこそ息む。これは変わらぬ心理である。『法句経』
 - ③兵^{ひょう}戈^が無用^{むよう}。兵という字は軍隊。戈は武器です。平和な世界には、軍隊も武器も必要がなくなります。『仏説無量寿経』

地球の未来のために

2015年、私は被爆者団体から推薦され、ニューヨーク国連本部で、核拡散防止条約 NPT 再検討会議に合わせ、日本被爆者団体協議会代表団の一員として参加させていただきました。団体からは、僧侶の姿で参加するよう伝えられました。私はようやくお釈迦様の真理の言葉を世界に発信するご縁が到来したことを、有り難く実感しました。ニューヨークでの初めての体験は貴重な得がたいものとなりました。長くなりますので、省略いたします。

2016年から2020年まで、核兵器禁止条約のための国際署名が世界中で開始しました。

2017年、核兵器禁止条約が国連で採択されました。

2018年、ICAN にノーベル平和賞が授与されました。

2020年、NPT 会議はコロナ禍で中止されました。NPT 会議というのは5年に一度です。このときはリモートでのみ会議が行われました。

2021年1月22日、核兵器禁止条約は50カ国の批准、署名を得て、ついに発効しました。国際法で核兵器は違法であるということになりました。

しかし、唯一の被爆国である日本政府は、批准、署名をしておりません。核保有国も同様です。あと20年もすれば、被爆者は1人もいなくなるでしょう。私たちは、日本政府への署名活動を続けています。

今や1万3000発あまりの、広島、長崎とは比べものにならない威力の核兵器が現存しているのです。被爆者の多くは病気をもちながら、最後の最後まで地球の未来のために活動を続けております。

最後に、武器を使った戦争は止めるべきです。どうか、叡智をもって話し合いを続けてください。被爆者から世界中の若者へのお願いです。

(2023年6月25日 富坂キリスト教センター1号館会議室にて)